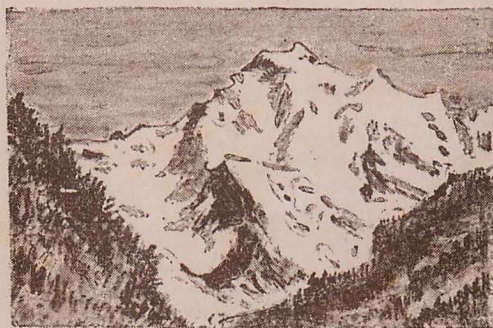


神はわが友

ヨハンナ・スピーリ 著
小 池 辰 雄 譯



東京 新教出版社 刊行



まへがき

戦争は熄やすみました。併しそこには多くの問題が残されてゐます。その中最も大切なものは何でせうか。

凡そ人の世の事象ことあらは、その源をすべて人の心に發します。人の心の源の問題は道德であり、道德の根源は宗教に存します。然らば戦後の混沌たる世界が必要とする最も重要なことは、宗教的革新であり、信仰的轉回であります。

神は現代人にとつて果はたして活ける現實でありませうか。そこには千態萬様の偶像崇拜と、消えては結び結んでは消える宗教的感情の漠たるものがあるに過ぎません。神を無二の友と有もたず、生活の中心に有たない處に、宗教もなく信仰もありません。然らばさういふ改革は何處から始めねばなりませんか。まづ家庭からでなければなりません。その親に、その子らに、純眞な信仰が芽生えねばなりません。決定的轉向が始まらねばなりません！

ヨハンナ・スピーリ (Johanna Spyri 1829—1901) はあの有名な「ハイディ」を書いたスイスの作家ですが、この物語にも亦、女史の床しい信仰が泉のやうに流れてゐます。この闇の世の汚濁の巷に、今も響くこの銀の鈴の音を聞く耳ある者はお聴きなさい。この現し世の荒みきつた曠野に、今もかがよふこの星影を見る眼ある者は仰ぎ瞻なさい。「げに神をだに友とし有たば、助けあり到る處に。」がこの原作の標題ですが、この歌詞に應へて「神はわが友」と告白し得る日を、新しき日本の「老いにも若きにも」祈る心で、斯く改題しました。この意味に於て女史の作品を相繼いで世に紹介したき所存です。

スピーリの原本を快く貸與された信友松田智雄氏に心から感謝すると共に、人知れず日本のスピーリとして花咲きながら、はやくも天上の原野に移された松田瓊子さんへ、一掬の岩清水のかはりに、この拙譯を捧げます。

一般の理解を助けるために、若干の事柄に就て簡単な註を各章の終りに附加しました。

なほこの出版のため、種々の勞を執られた敎文館員三品要二氏、石井晴美氏、並びに新敎出版社員秋山憲兄氏に深謝致します。

一九四五年十月月明の夜

孤禪寺の村里にて、

譯

者

目次

まへがき	1
一 バスチとフレンツェリと一つの歌	3
二 年賀歌手の不意打	19
三 驚異の連續	46
あとがき	60

親子への
物語

神はわが友

ヨハンナ・スピリー
小池辰雄 原作
譯

で、小徑が急峻に登つてゐます。そのあたりに小さな家畜小舎のあるささやかな家が建つて居り、それを少し登つたところに再た一軒、それからまた一棟、またその先に、丁度山に身をすり寄せたやうにして、一番小さなのが在りましたが、その扉が大變低いので、身を屈めなければ男の人は入れない仕末です。家の背後の山羊小舎ときては、どうみても瘠せぎすの山羊の外は何ものも入り得ない程小さくあります。この小さな家には室が二つしかなく、僅かに煖爐部屋と側房がこれに連つてゐるばかり、この煖爐部屋の扉口の前のちよつとした場所には竈が置いてあります。夏には扉口が終日開いたままになつてゐるので、この伏屋も明るいのですが、普段は全く小暗いわけです。

この山小舎には草刈人のヨセフが住まつてゐたのですが、もう彼が他界してから四年になります。今はもの靜かな忠實やかな妻のウフラと堅つかりした健やかな小柄な少年バスチと優しい明るい縮毛のもつと小柄な少女フレンツェリといふ二人の子女が遺つてゐるばかりです。このヨセフとウフラとは極めて靜

かな平和な暮らしをして居りました。彼らが同時に家をあけるのは、彼らが相伴つて教會へ行く時だけでありました。普段の時はウフラは家に止まつて働くのが常で、ヨセフは晨に稼ぎに出かけ、夕に還つてくるのを家業としてゐました。彼らは男の兒が與へられた時、年曆カレンダーを繰り展いて、それが聖セバスチアンの日に當つてゐたので、このバスチといふ名をつけたのです。その後、女の子が聖フランシスの日に産れたのでフランツィスカと名づけましたが、土地の風習に従つてフレンツェリとなつたわけです。この子等はウフラにとつていつも最善の寶であつて、夫を失くしてからは彼女の大きな慰めであり、この世に於ける唯一の欣びでありました。彼女は子供たちを小ざつぱりとしたキチンとした身なりにして置いたので、彼らが一番見映えのない家の子供で、而もこの界隈の最も貧しい一婦人の子らであるとは何人も夢にも考へ及びませんでした。毎朝彼女は彼等の手脚を丁寧に清潔にしてやり、フレンツェリの波打つ明るい金髪を梳くしつてやるので、蓬髮おどろがみとなることはありません。日曜日日曜の朝にはいつも二

して損ねまいといふに過ぎません。ところである隣人が彼女に、「ウフラさん、お前さんの子は好い子達だね。男の兒は母の果のやうだし、フレンツェリはふつくらした頬と金色の巻毛で、祭壇の畫のやうなもの。」などと言ふときは、彼女は應へるのですた、「神様があの子達を丈夫にしてゐて下さり、正直な子になりさへすれば好いので、いつもそれをお祈りして居ります。」と。そして彼女は實際さうしてゐました。

彼女が夫を失つてからもうやがて五年が経たうとしてゐました。バステは少し前に満六歳になりました。フレンツェリは五歳になつたのですが、あまり愛らしいので、頑丈な手脚の、見るからに堅つかりしたバステよりも二歳も小さく見えました。

荒天の秋でありました。冬も従つて夙くやつて來ました。寒さも格別厳しい冬になるやうに見えました。十月にもう深い雪となり、薄らぐ様子も見せませ

ん。十一月にはウフヲの小舎^{こや}は雪の中に深く隠れるやうになつて、殆ど外へ出ることが出来ない程になりました。バスチもフレンツェリもストーブの片隅に座を占めて、扉口に現はれることはありませんでした。お母さんは時折外出しなければなりませんでしたが、それも家に一片のパンも無くなつた時に限りしました。山を降ることはまづ不可能といつて宜い程雪が深く積りました。少し上の方に住んでゐる或る一人の男より他に、小徑^{みち}を拓いてくれる人もなく、その男の足跡を辿つて彼女はやつと歩くといふやうなわけでありました。でも雪がまた新たに降つてしまへば、彼女は路を自分で捜し、自分で踏み分けて行かねばなりませんでした。斯ういつた行路難から歸宅したときは、彼女は疲れてしまつて、打ち倒れまいとするには全身の力が要ることも屢々でありました。それでも、しなければならぬ事が多くて、なかなか休息をとるどころではありませんでした。晩になつて、子供たちの着物の繕^{つくろ}ひをしてゐるときに、動もすれば彼女を黙然とさせ深い嘆息^{ためいき}を壓し出させるものは、一日の疲れではなかつ

たのです。重い憂患^{うれひ}が彼女を壓し潰さうとしてゐました、而も日に日にその重さは加はるのでした。彼女は一片のパンをどうしたら得られるものかと途方に暮れることが稀れでありません。仕事に容易^{たやす}く有りつけなくなりました。縫ひ仕事や紡^{つむ}ぎ仕事を一週間やつてみても何の儲けにもならなかつたので、一片のパンも買ふことが出来ませんでした。さうなると瘦せた山羊から搾^{しぼ}つた僅かばかりの乳が三人の糧^{かて}の全部でありました。

斯^こんなわけでしたから、ウフラは夜になると、よく幾時間もあれこれと思ひ廻らすのでした。どんなに少なくても宜^いいから何んとかして何かを得たいものだ。といふのもまだ永い三ヶ月の冬の月日が彼女を待つてゐましたから。嘗て、この母が子供らを寝かせ、その寢床の側で針仕事をした時は、いつも歌を歌つてやりながら彼らを眠りにつかせたのでした。今は、この母も默然と腰をおろしたままで、壓しつけられたその胸からはどんな歌も昇らうとはしないのでした。この様にして或る夕、彼女はもの言はず憂^{うれ}はしげに坐つてゐました。戸外

では風が咆^はえて、今にもこの小さな家を吹き倒しはしないかと思はれるばかりに、ガタガタと揺^ゆぶつてゐます。でもフレンツェリは直ぐ眠り込んでしまひました。彼女は風がどんなに咆^{たけ}え猛り、吹き荒^{すさ}んでも、お母さんが自分の側に坐つていらつしやるのを見さへすれば何の心配もないのでした。ところがバスチは眼を大きく見開いたままで、お母さんの繕^{つくろ}ふのを觀てゐました。突然彼は口を開きました。「ねえ、お母さん、どうしてもう歌を唱^{うた}はないの？」

「ああ！ もうそれはお母さんに出來ないの。」と彼女は溜息をつくやうに言ひました。

「歌はもう忘れてしまつたの？　ぢやあ待つて、僕が教へてあげる、斯^かうでせう。」そこでバスチは寢床に端然^{きぢん}と腰をかけて歌ひ始めました。

今し降^{くだ}りぬ夜の帷幄^{とばり}、

森の上また道のべに。

汝れにぞ祈る我らみな、

み恵をあたへたまへと。

バスチは確つかりした澄んだ聲音でこの唄を完全に唱ひ拔きました。それはお母さんから幾晩も聞かせられたものでした。お母さんは驚き異しみました。と突然ある想ひがお母さんの頭腦を貫きました。「この兒を私に神様がお遣はしになつたのだ、」さう言つて彼女はその少年を欣ばしげに見遣りました。「バスチ、お前は私の稼ぐのを助けてくれるね、さうすればお前にもフレンツェリにもパンをあげることが出来るのよ。きつと喜んでやつてくれるね。」

「ええ、やりますとも、やりますとも。——今直ぐ？」バスチは熱心に問ひかけ、直ぐベットを降りました。

「いいえ、いいえ、まあ床にお入り。随分寒さうぢやあないの。」お母さんは急いで少年を再た蒲團の中へ入れてやりました。「でも明日お前に歌を一つ教

へてあげる。元日に山の人たちに歌へるよ。それまでさう永いことではないからね。さうすればみんながお前にバンも、それからキット胡桃もくれますよ。」

バスチは是等の獲物の楽しみや自分の大切な働きの目論みもくろのために興奮して全く眠れなくなり、再三諷くのでした、「お母さん、まだ明日あしたにならないの？」と。けれども遂々とうとう睡氣ねむけがさして、バスチの眼蓋は閉ぢてしまひました。

翌朝彼は、前の晩眠りに就いた時と同じ想ひを抱いて眼覺めました。けれども彼は我慢しなければなりません。お母さんが斯う仰つしやつたからです、「夕方になつたら歌ひませう。晝間はお母さんは山ほど仕事があるんですもの。」と。そこでバスチはフレンツェリに、お母さんが何を教へて下さらうとしてゐるか、またバンやそれからキット胡桃も彼がお土産にできるだらうことなどを語り聞かせて、待ち遠しい時間を短かくするのです。フレンツェリは緊張しきつて耳を傾けました。彼女も夕が待たれない氣持でゐました。

やうやく夕暮れになりました。お母さんは仕事がつつかり終つたので、豆ランプを燈してテーブルに付き、フレンツエリを一方に、バスチを他方にひき寄せました。それから彼女は、旅に出るバスチのために編んでやらねばならない小さな暖い靴下をとり出しました。そして言ひました、「バスチ、さあよくお聴きなさい。始めに私が二三度第一節を歌ひますよ、それからお前が出来るかやつて見ませう。」さていよいよお母さんは歌ひ始めました。さう經たないうちに、もうバスチと一緒に歌つてゐました。すると突然フレンツエリもとても熱心になつてその中に立ち混つて歌ひ出しました。お母さんはそれを聴くと愛ほしく點頭いてやり、やがて第一節が終ると彼女は言ひました、「フレンツエリ、よく出来たのね。キットもつと憶えられるよ。」さてみんながそんなにして何回もそれを合唱した揚句にお母さんは言ひました、「さあやつてみるかね、バスチ。お前も一寸手つだつてごらん、どうだね、フレンツエリ。」フレンツエリ

は嬉しさに頷うなづきました。

そこでバスチは堅かたつかりした聲で歌ひ始めました。お母さんは何んと驚かねばならなかつたことでせう、フレンツェリが嘗て聞いたことのない銀の鈴のやうな愛らしい聲で合唱するのを聞いたとき。而もバスチが歌の調べから一寸外はずれさうになると、この小さな女の兒が小鳥のやうに歌ひつづけて、倦うまずに全く正確に歌曲カグを歌ひ終へるのでありました。お母さんはとても歡びました。小さなフレンツェリが助け得ようとは夢にも想つてゐなかつたからです。斯うして二人が合唱したときに素敵な歌聲となつたので、彼女はただもう聴き惚ほれたばかりでありました。それは彼女の豫期を遙かに超えたものでした。毎晩非常な熱意で歌の稽古をしました。そして一週間が経つたときには、もう二人の子らは四節から成る全歌を何の躓つきもなくやりのけるのでした。彼らにとつてもその喜びは大變なもので、全歌を唱ひ終るとまた最初から繰り返し始めるといふほどで、自分たちの歌ひ方に満足してしまふことがありませんでした。こ

のことはお母さんを深く喜ばせました。といふのは、縦たてひ彼女が彼等の側に居なくとも、子供らは澁滞しぶたいすることがないといふことを確信し得たからであります。

十二月になりました、歳末も近づいて來ました。その少し許りまへ、暮方にお母さんはもう一度子供らと座を共にいたしました。彼等がその歌を何のあふなげもなく歌ふか、聽いてみたかつたからです。そして一緒に歌を始めました。けれども今度は彼等の方がお母さんをリードしました。彼等はそれほど確實たしかまた熱心でありました。お母さんが彼らと調子を合はせようとすると、どうしても自分の拍子タクトを少し速めなければなりません。彼らは全四節から成る新年の歌を淀みなく歌ひました。その歌は斯ういふのでした。

「古ふるりにし年は今ぞ逝はきける、

新玉^{あらたま}の年の始めぞ。

我らは祈る君らがために、
この年の豊^{ゆた}けき幸^{さい}を。

寒き冬の日今ぞ來にける。

この大地^{だいち}氷に凍^{こも}ゆ。

さはれみ神は近く在^いまして、
助け給^たぶみ旨のままに。

さはれ鳥にも辛^{かろ}くなりゆく、

その糧^{かて}をかち得^うん業^{わざ}は。

また童兒^{わらべ}らも巡^{めぐ}り歩^あきて

その糧^{かて}を求めゆくなり。

二年賀歌手の不意打

元旦が來ました。晨はやくお母さんは教會へ行きました。彼女は缺かしたところがなかつたのです。さて彼女は待ち望んでゐた子供たちに、有る限りの色々な暖い衣類を着せてやりました。といつても勿論澤山あつたわけではありません。フレンツェリにも暖かな靴下が一足編んでありました。それは特に今日のお調へ品でありました。おしまひにお母さんはいつも自分が纏うてゐた古布をとり出して、フレンツェリにぐるぐる捲き附け、フレンツェリを腕に抱へて言ひました、「さあ出かけませう。」バスチは先立つて行きました。深く降り積つた雪の中をとても勇敢に掻きわけて、シェツヘンバッハ沿ひの道まで降りてゆきました。此處まで來ると彼はお母さんと打ち並んで歩くことが出来るやうになりました。それで彼は澤山質問を發して、何處へ行くのか、それから何ん

なことがあるのかなどといろいろ訊ねるうちに、時は速くも経つて、知らぬ間に小一時間が過ぎました。

彼らは今やアルトドルフの外廓の家々のところまで來てゐました。お母さんは澤山の子供たちが、年賀の歌を唱ふために途に群居るのを直ぐみとめました。その子供らは戸毎に出たり入つたりしてゐました。ウフラはそこらに立ち寄ることもなく、古塔の脇の教會から程遠くない大きな旅館まで來ました。此處はまだかなり静かでした。お母さんはフレンツェリを床に卸し、包んだ布を解いて、二人をこの大きな建物の中へ送り込みました。彼らがそこに入つたら直ぐ彼らの歌を始めるやうに云ひ聞かせました。彼女自身は幾分塔の背後の方に退いて、子供たちが再た出て來た時に見えるあたりに居りました。

バスチは、フレンツェリの手を確かかり把つて、その家に入ると直ぐ明朗な聲で歌を唱ひ始めました。フレンツェリも調べ快く彼に唱和いたしました。す

ると客間の扉が開き、客人たちは子供らの中へ呼び入れました。彼らはその歌が上手だといつて褒めました。お母さんがバスタの腕に抱へさせた籠の中には、其方此方から幾つとなくバンが躍り込み、此處彼處から銀貨が飛び込みました。それからこの旅館のお女將さんが兩手に山盛りの胡桃を入れてくれ、斯う言ひました、「お正月にはバンにおまけの品をあげるのさ！」そこでバスタは聲高らかに、フレンツェリはもの柔かに感謝の有難うを告げました。子供たちは褒美の品に心を躍らせてお母さんの許へ走り出て來ました。それからまた他の家へと行くのでした。けれどもそこにはもう歌つてゐる子等がをりました。するとまた他の兒等も後からやつて來ました。そのため同じ家に大した群が一緒になつてしまふことも屢々でありました。彼らがみんなで思ひ思ひに歌はうとしたり、或る家では奥さんが他の家では御主人が出て來て、そんな大騒ぎをされるよりバンを一片宛あげようと言ひました。時には施物が貰へない子供も出來て、徒手で立ち去らねばなりませんでした。一つの扉口にそんなにも澤山の子

供らと一緒に立ちどまるやうなときには、幾人かの奥さんはフレンツエリを自分のところへ呼び寄せて懇ろに斯う言ふのでした、「おいで、小さな兒、お前さんは凍えさうだね、何かあげよう。そしたらお歸り、葉っぱのやうに慄へてゐるぢやあないの。」

二人が斯うして五六軒の家で歌つて、また或る家から出て來たときに、お母さんはもうこれ以上續け得ないことを見てとりました。戶外はひどく寒く彼女自身が殆ど硬直つてしまふほどでした。か弱いフレンツエリは手脚がみんな慄へてもう歌ふことが出來なくなりました。バスチでさへ全く蒼ざめてしまひ、手も硬くなつて何も握めなくなり、何かもらふときには腕に通した籠を突き出すだけでありました。

さてお母さんは素早くフレンツエリを再た包んで腕に抱へました。

「バスチ、お前はしつかりお歩きね、さあおいで、再た暖くなりますよ。」と彼女は言ひました。彼らは走りに走り、遂々彼らの山小舎に戻りました。さて今や彼ら三人はささやかな爐邊近く身を寄せて、手脚を暖めました。温まるとバスチは籠をもつて來ました。彼らは、でも一體何々がその中に入つてゐるかを見なければなりませんでした。二人とも非常な努力の揚句、銘々が素晴らしきパンの塊と胡桃とを獲たわけです。かくして彼らは共に愉しい新年の夕をお祝ひしました。お母さんも歡喜と感謝に満ちてゐました。大幅の援助が與へられなくとも、幾日かパンには困らないことになりました。其處此處で籠の中へ投げ込んでくれた銀貨は、よく役に立てることが出來ました。

その後も無論辛い憂患多い日がやつて來ました。お母さんはなほ屢々、窮乏と寒冷とに對して戰はねばなりませんでした。けれども遂々永い冬も終りを告げました。暖い陽が再び輝きました。子供達は再たこの山小舎の前に腰けられ

るやうになりました。もう凍えることはありません。山羊も亦戸外へ伴れ出されました。山羊は美事な若草を喰べて、ミルクを少し許り多く出すやうになりました。

お母さんからは大きな重荷が取り去られました。といふのは彼女は最早薄つぺらな小舎の一時凌ぎの煖房のために、あちこちと薪を捜しにゆく必要がなくなつたからであります。今や陽ざしは暖く窗べにきらめき、爽やかな清々しい大氣は室に流れ込んで來ます。けれどもお母さんは冬中非常に勞苦し、かつかつの糧しか攝つてゐませんでしたので、彼女の力は盡き果てんばかりでありました。暖い春の陽すら彼女にその力をとり戻してやることが出來ませんでした。にも拘らず彼女はその勤勉な働きもその朝から晩までの不撓の活動も止めることがありませんでした。彼女は疲勞と衰弱のため仆れるかと思はれても、深い内的な憂慮がむしろ彼女をその都度新たに奮ひ起たせるのでありました。とい

をなほ看守つてゐました。バスチは何時までもジッと見詰めてゐました。

「お母さん、お母さんのバンは何處にあるの？」遂々彼は尋ねました。

「ないのよ、バスチ。でも別にお腹が空いてゐないの。お母さんは要らないの。」さう答へました。するとフレンツェリが急いでやつて来て、未だ残つてゐた小さな小さな塊をお母さんの口の中に素速く挿し入れました。そこでバスチも彼の塊をさし出して、ひどく嘆いて言ひました、「ねえ、ちつとも無ければ、お母さんは飢ゑてしまふでせう。だから願ひかけてあげますよ。」（けれどもお母さんはそれを彼に推し戻して、「いいえ、いいえ、バスチ、悦んでおあがり。ねえ、お母さんは喰べられないの。具合があんまり宜くないの。明日アルトドルフのお医者さんまで降つて行けさへしたら、お医者さんが何とかして下さるでせう。だからもう澤山よ。」）

最後の言葉をかすかに私語くやうに吐いて、突然彼女は眼を閉ぢてうしろへ仆れました。衰弱と過勞のために彼女は卒倒したのでありました。——バスチはお母さんを暫らく看守り、靜かにフレンツェリに言ひました、「おいで、いいことがある。お母さんが眼を醒さないやうに靜かにおしよ。ねえ、お母さんは眠りかけていらつしやる。」そこで彼はフレンツェリの手を確つかり握つて、扉の方へ伴れて來ました。フレンツェリは音を立てるところではありませんでした、靴下も靴も彼女の小さな脚には無かつたからです。バスチも亦同じでした。斯うして彼らは全く靜かに扉口を出て、一緒に山を降りて往くのでした。彼らが急峻な歩道を辿つて山をくだり、それから彼らの行路が、奔流する谿川に沿つて伸びてゐる處へ來ると、バスチはフレンツェリを谿川から道の反對側に推しやり、更に相當の距離を草地に伴れ込んで、教へるやうに言ひました、「ねえ、フレンツェリよ、決して決して道のあつち側を通つちやいけないよ。でないとしエッヘンにおつこつちやふからね。お母さんがさう仰つしやつたの

を圍んでゐる澤山の若者をみとめると、恰好の隔^{へだ}たりから若者達に向つて歌ひ始めるのが最善の策と看てとりました。そこで彼はやをら力一杯の聲で始めました。それで、彼らは自分たちの騒音^{さわぎ}にも拘らず聞きとれたのでした。

「靜かにしろ！」と突如、大男の物凄^{ものご}い聲が怒鳴りました。その男はテーブルの上座にゐましたが、「靜かにしろッて言ふんだ。歌が聞えるぢやないか。俺たちの晩餐の音樂だ。」

若者たちは一齊に見廻^{みまわ}しました。彼らが古塔のやや後^{うしろ}ろに立つてゐる子供たちを見附けると、みんなで指し招き、同時に多くの聲が叫びました、「もつとこつちへ！」——「もつと近く！」——「もつとここまで！」

子供たちは歌ふのを歇^やめました。バスチは心得たりとばかりに近寄つて來ました。彼は併しフレンツエリを幾分牽つばらねばなりませんでした、彼女が大

分佈はがつてゐましたので。

さて件の深かくとした鬚髯の金髪巨人は猿臂を差し伸べて、バスチを更にテーブル近く引き寄せました。すると一同は叫びました、「さあ歌はせてくれんか、バルバロッサ。」

「それぢやあ、お前たちの歌を歌つてごらん。しつかり元氣を出して！」斯うこの男は命じました。

バスチは聲高に始めました。フレンツェリの優しい聲が幽艶な銀の小鈴のやうに之に伴つて、搖蕩ふこともなく彼らは歌ひました。

「古りにし年は今ぞ逝きける、

新玉の年の始めぞ

喧騒さわぎと途轍とつもない爆笑わらひが再たもや始まりました。けれども今度は多くの者が叫びました、「續ける！」——「續けて！」——「その先は！」そこで二人は歌ひました。

「さはれ鳥にも辛からくなりゆく、

その糧かたをかち得ん業わざは。

また童兒わらべらも巡り歩き

その糧かたを求めゆくなり。」

「それはやらなくちやあならん、そりやあやらなくてはいかん！」彼らは今や四方八方からさう叫びました。すると御馳走の品々が盛つてある澤山のお皿が子供らに差し出されました。けれどもバスチはそれに慙あはれはされず、確たしかつかりした聲音で歌ひ續け、フレンツェリも終歌おはりまで助けました。

「時をわかたず君らすべてに、

この年の幸豊さちとよかなれ。

げに神をだに友とし有もたば、

助けあり、到る處に。」

すると素晴らしい歡呼の聲が湧き揚がりました。一同は思ひ想ひに叫びました、「それは好いい祝福だ！ 我々の旅に幸福を齎もたらすものだ！」

ところでバルバロッサはバスチを身近かに引き寄せて、澤山の美味おいしさうな品々の盛られたお皿を彼の前に置きました。こんな御馳走は生れてこの方見たことがないものでありました。お皿の縁へりには雪のやうに白いパンの大塊が置かれてありました。バルバロッサは鼓舞激勵して言ひました、「ぢやあ、子供！

勇敢に追おしつ始めろよ、すつかり平たいらげるまで止めちやあ駄目だよ。」それから山

キツトお前さん達も空腹だらう、——ね、バスタチ？」

「はい、今でも。僕たちは今日殆どパンを食べてゐませんから。」彼はさう裏書きして、「でも、明日はお母さんが多分靴下を賣り出すことが出来ませう。

さうすればパンはもつと得られるのです。」

さてどの若者も何かしてやらうと致しました。或る者たちは袋をもつて來ることを、他の者達は運搬人を伴れてくることを。ところでバルバロッサはみんなに響き優る聲で叫んで言ひました、「さあ僕は何はさて置き、此の二人の子供らがどんなに腹一杯喰べるかを見たいね。他のことはそれからの話さ。さあお聴き、バスタチよ！ このお前さんの皿にあるものは、お前さんが喰べなさい。喰べ終つたら、お前のおつ母さんにその他の全部をあげるよ。」

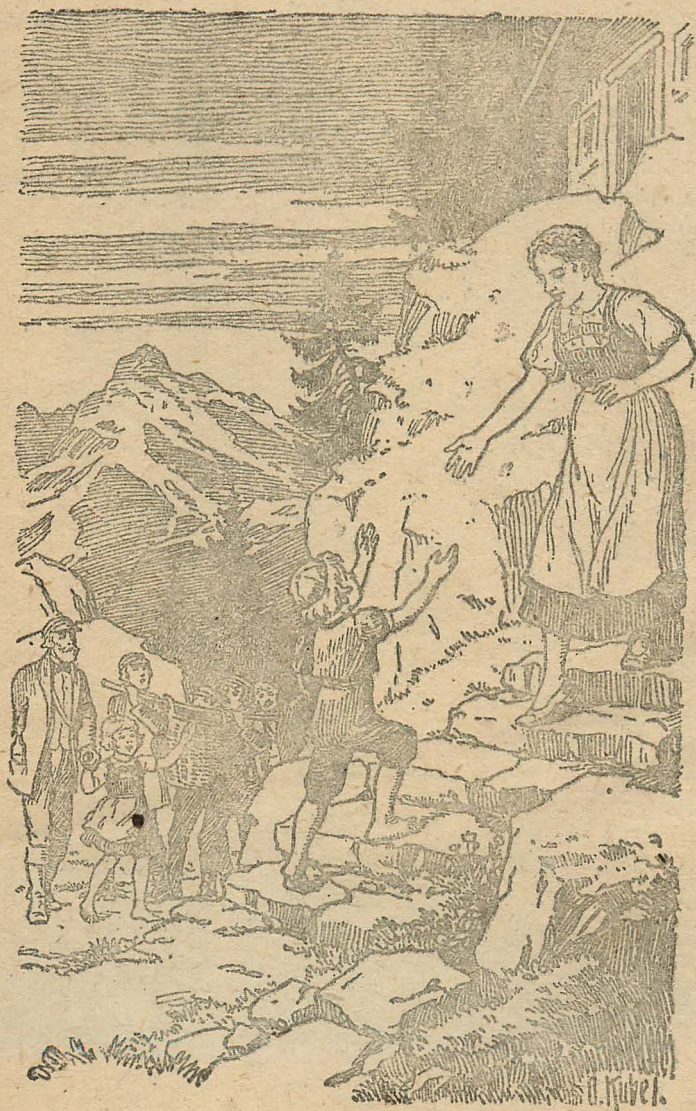
「この全部をですつて？」さうバスタチは問ひ返して、眼を輝かせながら一杯に盛られたすべてのお皿を指さしました。

「全部だよ！」バルバロッサは確言して、「さあ、お前さん、始めないかね。」今やバスチはフォークを手に把り、嬉しさうに美味さうに食べかかりました。バルバロッサはこれを見て大満悦の態でした。その悦びを特に共感したのはマクシミリアンでした、それといふのもフレンツェリが遂々その大空腹を満たすことに、潔くとりかかったからでした。食事は時折短かい問答のために杜切れるだけでありました。

「お前さん達のお母さんが、歌を歌ふやうにお前さん達を此處に遣つたのかね。」とバルバロッサが尋ねました。「いいえ、お母さんは眠り込んでしまひました。パンをちつとも喰べませんでしたし、疲れても居ましたから。お母さんはまたお醫者さんへ行つて、何とかしてもらひたいと望んでゐました。」バスチはなほも説明するのでした、「それで僕はフレンツェリを伴れて出かけたのです、お母さんが眼を醒ましたときにパンが喰べられるやうに。だつて最初バ

(三) 騎士 (Ritter) —— このマクシミリアンといふ青年は、中世の騎士を思はせる風格の持主で、而も中世の騎士が貴婦人の保護者たる役割を演じてゐたやうに、この青年も特に親切な世話好きな男であつたのでせう。それで普段から「騎士」といふ稱號を仲間から附けられてゐたものと思はれます。

(四) テル (Tell) —— ドイツの大詩人シルレルの劇「ウイルヘルム・テル」で有名な傳説的俠客テルのことで、彼は正にウリ州のビュルグレンで生れたことになつてゐます。



ん達がみんな一緒に來ましたよ。フレンツエリは駿馬うまが牽ひいてゐる輕馬車シンエリセに乗つて來ましたよ！」

さて今やバスチは眞先まっさききに突進して來て、叫こゑび續け、出遭つたいろいろのことを息もつかずに告げました。彼はお母さんが聞き及んでゐるとは期待出來ませんでしたから。彼が遂ついに上まで來てお母さんに飛びついたとき、お母さんは少年を抱き締しめて、心から神様に感謝いたしました。心からの歡びのために彼女は活氣づいて來ました。ところが驚きごとと意外なことが刻々に増大しました。といふのはバスチの背後うしろから一群の人々がやつて來て、而も彼女が舊知でもあるかのやうに、みんなが彼女に極めて懇ろに挨拶いたしましたから。その中の二人の若者が肩に背負つた二本の棒に大きな籠かごを懸けてゐました。をはりに一人の若者がやつて來ましたが、フレンツエリの手を把とつてゐました。普段はあれほどひつこみ思案な兒が彼に大層懷なついてゐて、お母さんを見ても彼

の手を離さうともせず、却て彼を自分と一緒にお母さんの許へ牽つぱつてくるのでした。

ウフラは何からどう感謝したらいいものか全く解りませんでした。といふのはバスタの説明でこの人達が子供らに示してくれた種々の好意を速くも識りましたし、腹一杯詰め込まれた籠がまた並々ならぬ好意を證してゐましたから。彼女はそこで直ぐバルバロッサの方に身を向けました。彼が一行の中で一番の大男でしたので、彼女は彼を何か指導者だと判定して、彼に眞心罩めて感謝いたしました。彼も感激を覺えました。さて不圖彼は彼女の爲に診斷を想ひ付いたので、彼女に自分と一緒に小舎に入つて、どこか悪いのではないかと告げてくれるやうに申し入れました。このことも彼女を大層喜ばせました。それで小舎の中で彼に述べて、彼女は別に苦痛はないけれども、衰弱と無氣力で殆ど立つことも歩くことも出来ない旨を告げました。そこで彼は、彼女が何を喰べ、何を飲んでゐるかを尋ねました。彼女はすべてをありのまま語りました。そこで

葉に窮して居りました。扱て大きな籠が紐解かれ、その中の一つ一つの包みから、新しい素晴らしい食物が轉げ出し、おしまひに下の方から、若者たちが特に調へてくれた白パンの大塊が三箇も現はれて來ましたので、バスチは有頂天になつて室内を足どり高く跳び廻はり、もう一度高らかに叫ばざるを得ませんでした、「どうも有難う、マクシミリアン！ どうも有難う、バルバロッサー！」お母さんは繰返し言はざるを得ませんでした、「これは神様があの若い人達にさせて下さつたことです。毎日あの人達の爲にお祈りしませう、そしてこの事を決して忘れないやうにしませう。」

一方、學生達は大満悦でアルトドルフの方へと降りて行きました。ただ「騎士」マクシミリアンだけが暫らく黙り込んでゐましたが、やがて突然言葉を發しました、「でもこれぢやあ宜くない。いや、これでは宜くない。我々は畢竟あの可哀想な婦人と子供らを、當座飢ゑ死にしないだけに助けたに過ぎない、

それ以上何もしてゐないわけだらう。あの高い處で冬暖い衣類きぐももなく、食物もなく、何んにもなくては、彼らはどうしようつていふのだ。それではいかん。我々は義捐金を募集しなければなるまい。直ぐ今日の中に。亭主ちやうしゅが収益を渡してくれよう。」

これに應じてバルバロッサが、「騎士マクシミリアン君、君の想念かんがへは宜いいさ、でも君の提案もくろみは實際的でないね。君は我々が今旅行中であること、歸還までには途みちなほ遠とほしだし、費用もいろいろ懸かかるといふことを忘れてはるまいか。義捐金の餘裕がどれほどあらうか。僕が別の企てをしてみよう。それは斯うだね、我々が新たに組合を組織するのだね、その名は『バスチアニア』さ。出資年額四マルク。名譽會員には我々の母や姉妹が任命され、バスチヤ小マドンナに必要な上衣やブラウスを我々によこす。我々が還つたら直ぐ年金は納入する。わが名譽會員たちは愛に充ちた協力を吝をじまぬだらう。斯かくしてバスチアニアの最初の小包が發送される段取りさ。」

「げに神をだに友とし有たば、

助けあり、到る處に。」

そこでバスチは直ぐ叫びました、「それはあの歌のだ。これはあの小父さんたちから來たんだ！」

さうです、それに違ひありませんでした。今やお母さんにも判然はつきりいたしました、この豊かな贈物は、誰あらう、彼女に親切を盡してくれたあの青年たちからこそ到來したものであることが。今や何と言ひ知れぬ感謝が彼女の心を満たしたことでせう、彼女がその子等と離別わかれもしようといふ大きな憂悶うれひから突如全く解放されましたので。さてまた彼女は、來るべき冬を心配なく暮し得るほど豊かな援助を得たのです。そればかりでなく彼女は葡萄酒に力づけられて再

た全く強健な身體になつたのであります。

ウフラはさてどんなに驚くことでありませう、その翌年再た同じやうな贈物が來て、それから毎年新たに送られた曉あかつきには。何となればバスチアニアは堅固な組合として存續し、名譽會員は自分らの子供たちが大きくなるに伴れて着れなくなる衣類やブラウスを見る毎に小さな年賀歌手のことを想ひ出すでせうから。この二人のことを彼らは、息子や兄弟たちから、そのスイス旅行から還つたときに、眼に見るやうに活き活きと物語られたのでしたから。

ウフラはさて自分の小部屋にいつまでも遺る記念額として、あの青年達がその贈物に添へてくれた一ひらの板片いじきれを揚げました。その板片に書いてある言はつねに語ります、

「げに神をだに友とし有たば、

助けあり、到る處に。」

〔註〕

(一) 「まあ、どうしたんでせう、あれは私の爲の使節つかひなのかしら?」は、文字通りには「天の神様! あれは私の爲の使節なのでせうか?」といふので、獨語的に解すれば前者となり、いのりの氣持をもつた對語的なものとすれば後者の意味となります。或は兩者の意味が同時に含まれてゐるものと見た方が作者の眞意に近いでせう。限定的な言語といふものの奥に無限定的なものを見なければならぬ消息は、こんな小さな一例からも首肯うけなづけます。

(二) 「どうも有難う」は、元來「神様、そのことに對して酬むかひて下さい」といふ語でありますから、ここでもバズチが青年たちに、「神様、あの小父さん達の御親切に酬むかひてあげて下さい!」といふ氣持を充分有つてゐたので、この語がおのづから發せられたものです。日本語としては致し方なく「どうも有難う」になつてしまつたわけです。ただ願ふことは、同じ日本語の感謝の辭の奥に、さういつた深い祈りの意味と意識とが、將來は含まれたきものです。

凡そ對象を全的に表現せぬところに日本的な特長の一つがあるとするとするなら、その對象をして、深刻偉大なるもの、その他あらゆる意味に於て高次的なものに擴充すべきでありませう。

然らばこの「どちらも有難う」(Vergelt's Gott)の一語も無限に天的な餘韻を含み得るでせう。

あ　と　が　き

詩も小説も物語も、読む人の心ごころにまかせ置き何らの解説を加へぬのが善いのでありませう。これに解説を試みるのは作者に對する一種の冒瀆となることもありませうし、讀者の自由なる心を拘束もし、搔き亂すことともならぬとは限りません。それ故に、譯者は茲にこの物語の解説を企てようとは思ひません。

乍併、譯者が一讀者として、これが讀後感的なものを、この物語の主顧となつてゐる詩句を中心に一言書き添へさせて戴くのも、何らかの御參考になりませうし、讀者としての責務——他人に對してではなく、自己に對しての——とも考へられます故に、敢て附記することになりました。

げに神をだに友とし有たば、

助けあり、到るところに。

「人事を盡して天命を待つ」とか「天は自ら助くる者を助く」とかいふ言葉があります。併し是等の二句には、何となく暖かみが缺けてゐるやうに感ぜられます。是等には未だ道德の

世界から信仰の世界を覗いてゐるやうな嫌ひがあります。然るに、この物語の標語たる「神を友とする」といふ消息は、完全に信仰の世界であります。そこには涙と汗とがあつても、力みかへるやうなものがありません。神を友とし、親しむ世界の勞苦は、勞苦の中に、言ひ知れぬ豊かさを宿してゐます。この物語のウフラは、夫に死に別れた寂しい寡婦であり、生業らしい生業を有たない婦人ですが、彼女の生活は、神を友として、これに信頼し切つての一生懸命の勞苦でありました。子供らに對する愛も、彼女の斯かる神との親しき交りが心底にあつてこそのものであつて、單なる母性愛といふものではありませんでした。そのことは、この母に育てられた二人の子供の性格にいみじくも顯はれてゐます。母の愛が、神への信仰によつて裏づけられてゐたればこそ、子供らは信頼深い、天的な明るさを有つてゐます。それが二人の子らのどんな言動に現はれてゐるかをここに指摘しない方が却て宜いと思ひますから申しません。而もそれは二人の子供らの全存在から端的に直覺されると言つた方が更に適切かも知れません。

このはじめな家族でありながら、何と豊かなあるものがそこに感ぜられるではありませんか。それは、神を友とする者のみが有つあるものであります。神を有つ者は一切を有つから

あ　と　が　き

眞に幸なるクリスマスまた新年が讀者の一人一人の心に訪れんことを祈りつつ。

一九四五年　師走

昭和廿一年四月十五日印刷
昭和廿一年四月二十日發行

神はわが友

一〇、〇〇〇部

定價貳圓五拾錢



譯者 小池 辰雄

發行者 東京都龜町區飯田町二丁目七番地
長崎次郎

印刷者 東京都世田谷區祖師谷二丁目一二三六番地
田中末吉

發行所

東京都龜町區
飯田町二ノ七

株式會社 新敎出版社

(振替東京九九九一番)
會員番號A一二二〇〇三番

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給統制株式會社

大和印刷・青木製本



